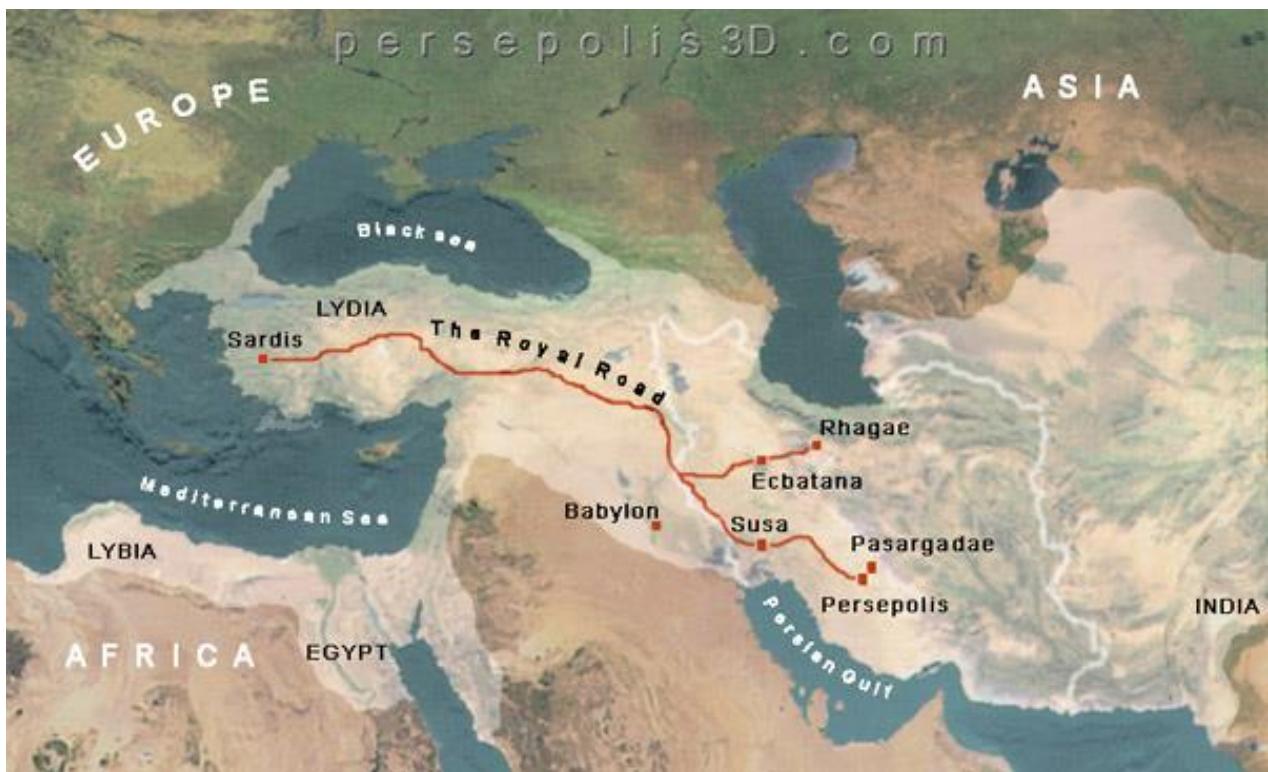


ペルセポリスを見る③

ペルセポリスというのはギリシア語で、「ペルシアの都市」という意味です。当時、ペルシア語で何と呼んでいたのかはわかりません。現在イランでは、タフテ=ジャムシードと呼んでいます。「ジャムシード王の玉座」という意味です。ジャムシード王というのは、イラン版『古事記』である『シャーニナメ(王の書)』に登場する、神話時代の王。名君でしたが、次第に傲慢になって神に見捨てられ、アラブ人の王に殺されるという話になっています。アケメネス朝の滅亡後、その記憶は薄れていき、ペルセポリスが何の遺跡なのか、わからなくなっていました。

19世紀、英國の軍人ローリンソンが楔形文字の解読に成功し、発掘調査も行われ、ここがアケメネス朝の都であることが明らかになりました。20世紀、イギリス・ロシアの侵略に抗して民族主義が高揚したパフレヴィー朝の時代には、「栄光のペルシア帝国」が政治宣伝に利用され、1971年にはここで、「ペルシア建国2500年式典」が行われました。この式典で得意の絶頂だった国王パフレヴィー2世は、8年後のイラン革命でホメイニに倒されることになります。イスラム革命政権は、イスラム以前のアケメネス朝には興味がないようです。イスラム教では、イスラム以前の時代を暗黒時代とみる一方、民族の枠を超えたイスラム共同体を重視するからです。

しかし何人かのイラン人に聞いてみて、彼ら最も誇りに思っているのは、今もアケメネス朝だということがわかりました。エジプト・ギリシアからインダス川まで支配したアケメネス朝ペルシアが、イランの栄光の時代なのです。イラン人の自己認識(アイデンティティ)は、まずイラン人(ファールスイ)であること、その次が、イスラム教シーア派であることのようです。



▲ アケメネス朝の最大領土。白枠が、現在のイラン。 <http://persepolis3d.com/>

紀元前550年、メディア王国から独立してアケメネス朝を建てた**キュロス大王**は、最初**スサ**に都を建設しました。しかしメディアの都**エクバタナ**や、新バビロニアの都**バビロン**も、都として使われます。王は、夏には高原のエクバタナ、冬には平地のバビロン、春にはスサに移動したのです。

2代カンビュセスが殺されたあと、各地の反乱を平定した**3代ダレイオス**は、スサの東方の大規模な宮殿の建設を開始しました。ペルシアでは、3月の**春分の日を新年として祝う**習慣があり、この新年祭には帝国各地の諸民族代表が、大王に朝貢します。その儀式の場として特別に作られたのがペルセポリスです。つまりペルシアの宮廷は、バビロン(冬)⇒ペルセポリス(新年)⇒スサ(春)⇒エクバタナ(夏)と移動したことになります。確かにペルセポリスは、夏を過ごすには暑さがきつすぎる！



バスが遺跡入り口に着きました。入り口には大型観光バスが乗り付け、土産物屋が並びます。大音量の音楽がかかっていて、雰囲気ぶち壊しです。まあ、観光地というものは、どこでもこんなもんです。チケットを買って中に入ると、静寂が支配します。木立を抜けると空間が開け、前方に、こういう光景が広がります。

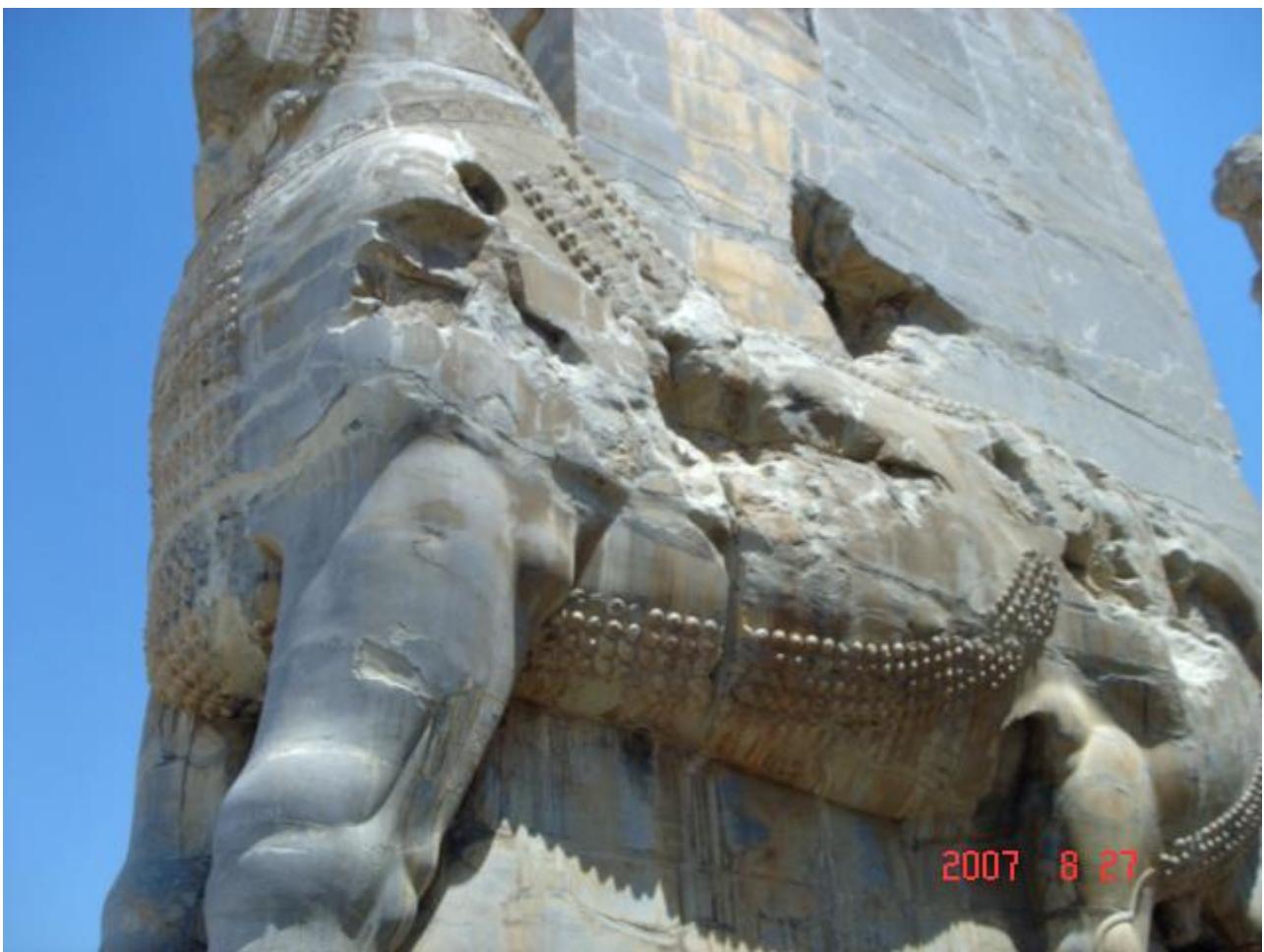


▲ ペルセポリス正面入り口。中央にクセルクセス門。その下に、左右に伸びる大階段。

正面が東です。春分の日には、正面の山から朝日が昇ります。もともとあった大地をうまく利用しています。大階段を登ることで、これから特別な場所に入るんだ、という気持ちになります。



▲ クセルクセス門。ペルセポリスの正面ゲート。

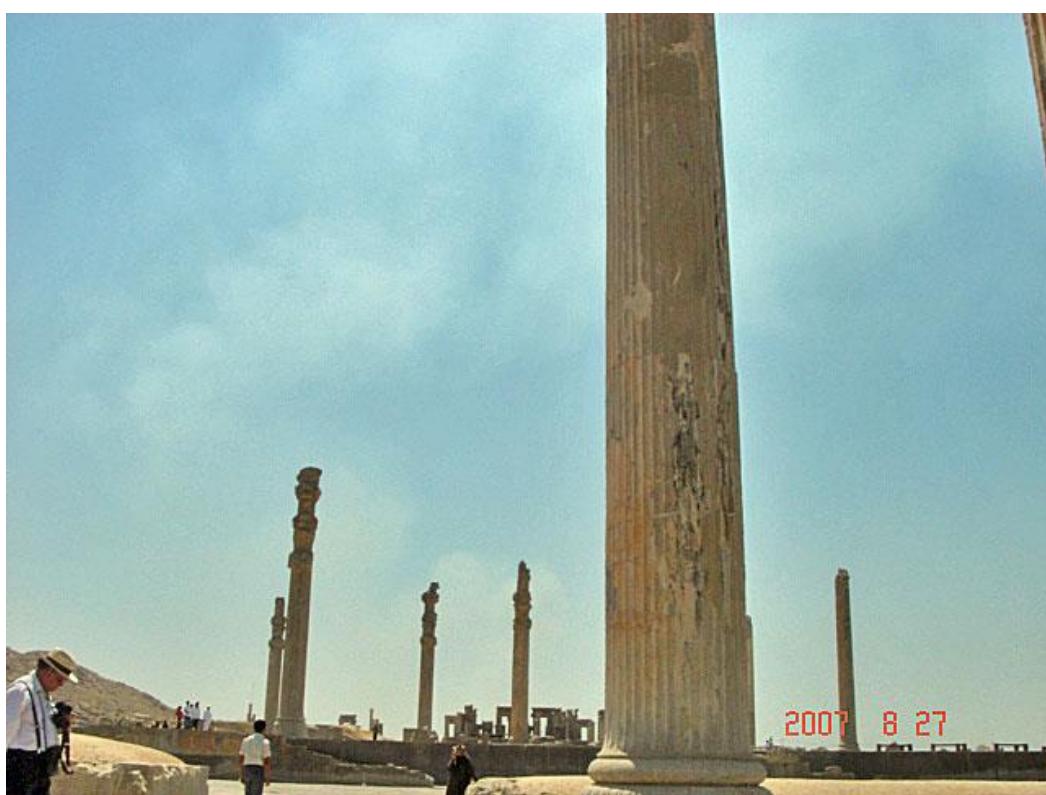


▲ クセルクセス門を守る怪獣。顔は、のちに偶像を嫌うアラブ人イスラム教徒が破壊した。

門をくぐって右手(南方)を向くと、謁見の間(アパダナ)。ダレイオス時代に、謁見の間とダレイオス宮殿が完成。次のクセルクセス時代に、クセルクセス門、百柱の間、などが増設されました。



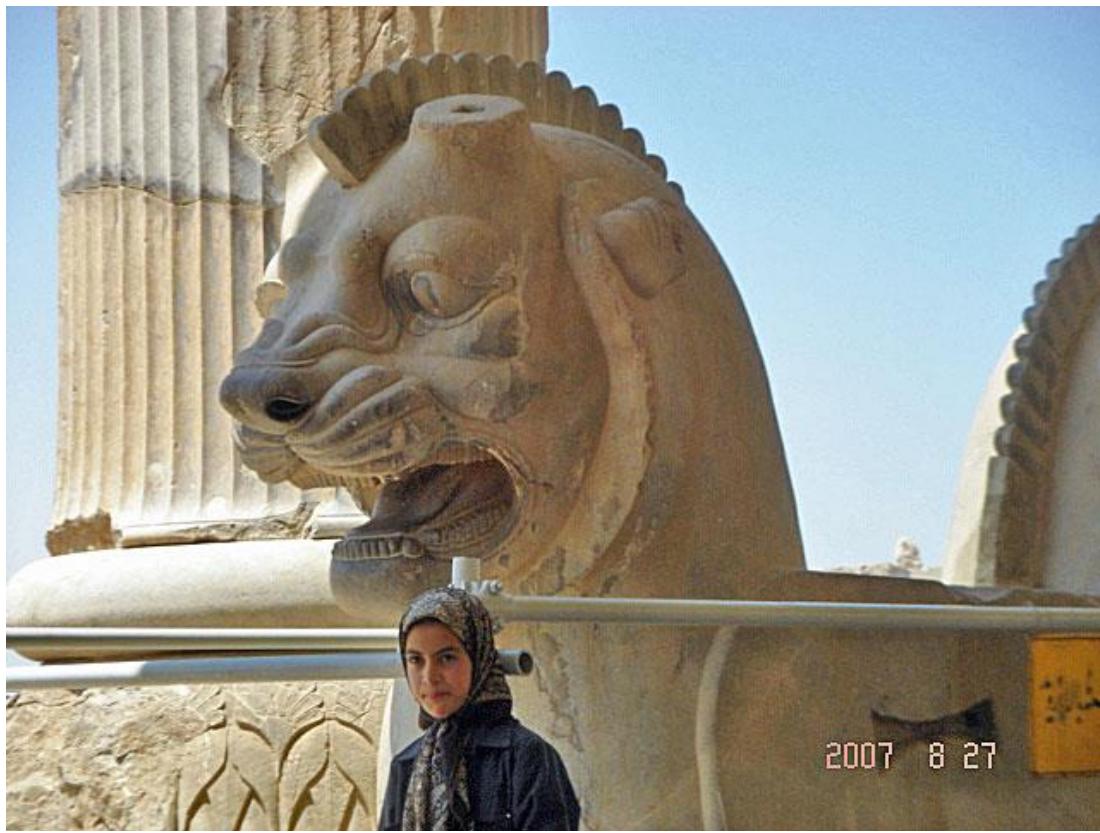
▲ 南方を望む。巨大列柱は、謁見の間。その奥の建造物は、ダレイオスの宮殿。



▲ 訿見の間(アパダナ)。破壊される前は、柱の上に木造の屋根があった。



▲ 謁見の間の柱。この柱の上に、木の梁はりを支えるライオンの柱頭があった。



▲ 柱の上に乗っていたライオンの柱頭。このでかさ！



▲ 謁見の間の門を守る人面怪獣。



▲ 玉座につくダレイオス(最上段)と、護衛兵たち(二段目以下)



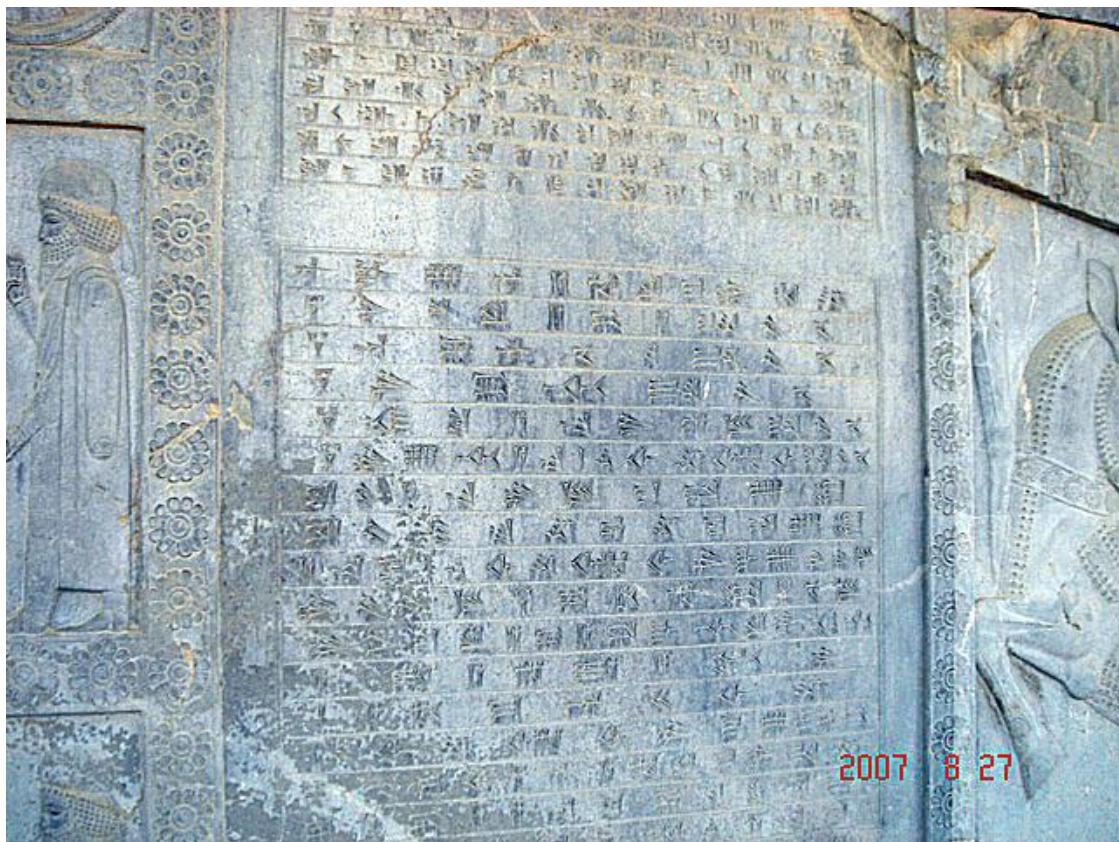
▲ ライオンと戦うダレイオス。「王の猛獣狩り」は、オリエント美術で好まれたテーマ。



▲ 謁見の間、正面。謁見の際、ダレイオスがこの上に立った。上段に、王権のシンボル、有翼日輪がある。下段のコ士たちは、中央を向いて整列している。



▲ 牡牛おうしを襲うライオン。牡牛座は「冬」、しし座は「春」のシンボル。立春を意味する。



▲ 楔くさび形文字の碑文。ドイツ人グローテフェントが解読した。



▲ 朝貢使節たち。遺跡の石材は黒大理石。磨けばこのように黒光りする。



▲ 北から見た謁見の間。よく見ると、柱を切断しようとした傷がたくさんある。

「百柱の間」の柱は、すべて根元から切断されていました。エジプトのピラミッドを覆っていた石灰岩が、のちにイスラム教徒によってはがされ、モスクの建設に再利用されたように、ペルセポリスの石材の多くも、持ち去られてしまったのでしょう。それでも破壊できなかったものが、今日まで残ったわけです。



▲ クセルクセスの宮殿。兵士たちが中央を向いている。この上に、王がお出ましになる。



▲ 有翼日輪に乗るアフラ=マズダ神。ゾロアスター教の最高神。よく破壊されなかったものです。

紀元前331年、アレクサンドロス大王がギリシア軍を率いてペルセポリスを占領し、黄金3000トンを略奪。このギリシア軍占領中に、故意であったのか、偶発的であったのかはわかりませんが、宮殿は炎上し、廃墟と化しました。

伝説では、アレクサンドロス軍に随行したアテネの遊女(慰安婦)タイスが宴会の席で、「(ペルシア戦争で)アテネを焼いたクセルクセスの宮殿を、焼いてしまいましょう!」とそそのかし、酔った兵士たちが放火した、という話になっています。

それから2300年。ここでは、時間が止まってしまったようです。

兵つかものどもが夢のあと

「で、アレクサンドロスのことを、イラン人はどう思っているの? 侵略者?」
「彼はペルセポリスを破壊しました。でも彼は、…偉大な男ね」とガイド氏。
歴史上、何度も異民族の支配を受けてきたイラン。そのようなことには、免疫ができているようです。

ここで発掘された国宝級の遺物は、首都テヘランの考古学博物館にあります。遺跡の中の博物館には、土器がおいてあるだけです。



▲ ペルセポリスの全体像。

© mogiseka



▲ 破壊される前のペルセポリス。 <http://persepolis3d.com/>



▲ おまけ。ツアーの同行客で、テヘランから来たという若夫婦の2歳のお嬢さん。「写真、取らせて」とお願ひいたら、だっこさせてくれました。お茶とかピスタチオとか、いろいろごちそうになりました。

(071028 更新)